
未来からの着信

小賀田一丸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来からの着信

【Nコード】

N3716A

【作者名】

小賀田一丸

【あらすじ】

主人公竹原裕太は未来の自分からの電話により、自分の身を守ったり、親友の命を守ったり、愛する人を守っていく。

第1話・楽しい学園生活…（前書き）

産まれて初めて小説を書きます（^ ^ ;）

裕太はまだ携帯を持っていない事にしました。漢字等間違っている
かもしれませんが何卒楽しく読んでいただければと思いますm（
ー）m

第1話・楽しい学園生活…

… 2004年12月24日東京… 僕、竹原裕太は今日過去の自分に電話を掛ける事になる… それはずいぶん前にさかのぼる…

3年前

朝の日射しが僕の顔を照らす。僕はそれと同時に起きた。起きたらすぐに目覚まし時計を見て思った、

「またやつちやっただよお」

僕は直ぐに布団から出て、階段をかけ降りリビングに入った。

「母さん。何で起こしてくれなかったの、もうやばいじゃん」「さつき起こしたのに起きなかったじゃない。」

こんな会話を済ませ僕はさっさと朝ご飯を食べ、自分の部屋へ戻り制服に着替えて階段をかけ降り、玄関で靴を履いていると後ろから「裕太、お弁当忘れてるぞ。」

姉ちゃんはお弁当を渡してくれた。僕もバッグにお弁当を詰めて学校へ走って行った。

学校へ走って行っている途中で前に僕と同じ制服を来た人が歩いていた。誰だ？もう学校の時間ギリギリなのに余裕で歩いてるよ。と思いついていたら教室の後ろのドアからゆっくりと修也が入ってきた…が！

そして、僕はギリギリセーフで遅刻にはならなかった。自分の席に座って少し休憩してからきずいた。

「あれ？修也いないな。まあ、いいか」

と思いついていたら教室の後ろのドアからゆっくりと修也が入ってきた…が！

「こら！秋元！バレバレだぞ！」

先生は笑いながら言った

「あちゃゝバレたかあゝまあドンマイ」

「まったく。遅刻な！」

と先生が言くと

「はいはい」と言いながら僕の隣の席に座った。

「おはよう修也。お前が遅刻なんて珍しいな」

「今日はちよつと寝坊してね。つてか今日裕太、俺の事無視して先に走って行つたら」

「っあ！あれ修也だったのか！余裕そうだったから修也じゃないと思つたよ」

僕たち二人は笑いながら会話をしている。修也とは小学生からの友達だ。いや、親友と言つてもいいだろう。まあこんな感じであつというまに1限目…2限目…3限目…4限目…と過ぎていった。

「飯だあー！飯だあー！」

修也は皆にお昼を伝えるかの様に叫んだ。

「わかつたわかつた。お前のそのテンションは何処から出てくるんだかね。」

僕は笑いながら言つた。

「さあ？それより食堂行くぞー！」

修也は今ご飯の事しか頭に無いのだろう…と思つている間に修也は食堂へ走って行つてしまった。

「おい！待てよ！」

僕もその後を走つて食堂へ向かつた。

食堂へ着くと修也はもうご飯を食べていた。

「はあはあ…置いてくなよ」

「わりいわりいお腹がもう我慢出来ないつて言うからさ」

「まあ、いつか。ちよつと飯買つてくる」

と言ひ僕は食堂の売り場に行った。

「おばちゃん、たぬきうどんひとつ」

「はい、ちよつと待つてね」

おばちゃんはたぬきうどんを作り始めた。僕はこのあたたかいたぬ

きうどんが一番好きだ。

「はい、お待ち。250円ね」

僕は250円を渡し、たぬきうどんを持って修也の隣に座った。

「おっ！またたぬきうどんか！裕太！良く飽きないな」

「お前だつていつつもたぬきうどんじゃなか。」

ご飯を食べる時も僕達の会話は絶えない。

「くったくった」

僕達は同時に言った。

「はは同じ事言つたな」

修也は笑いながら言った。

「だな。」

食器をおばちゃんに返しながら言った。

キンコーンカーンコーン

「やつべ！ゆっくり食いすぎた！裕太次の授業何だっけ？」

「理科理科！しかも理科室！」

「理科かよ！走るぞ！」

理科室へ走って行っていると、トゥルルル！修也の携帯が鳴った。

「はい、もしもし。：今から行くところ」

「良いよな携帯」

「まあな、結構便利だしな。着いたぞ」

ガラガラガラ

「お前ら遅いぞ！」

と先生は少し怒っていた。

「すみません」

二人同時に言った。

「早く席に着いて。」

「はい」

二人は席に着いた。

「はいじゃあ実験の事説明するから……」

と先生が説明をしているとき僕の隣で修也は携帯でゲームをしてい

た。

「こら！秋元！携帯いじるな！」

と言って先生は修也の携帯をとりあげた。

「まったく！放課後まで没収だ！」

「はあい」

修也はしょんぼりして言った。

「携帯は便利だが、こんな時もあるんだぜ」

苦笑いしながら修也は僕に言った。

第1話・楽しい学園生活…（後書き）

終わりは、修也が携帯を取られておしまいです。いかがだったでしょうか？第2部で裕太に携帯を持たせたいと思います（*^ー^）
次も是非読んでくださいね。

第2話・鳴るはずのない携帯（前書き）

やっと2話を書き終わりました。今回はやっと裕太に携帯を持たせる事が出来ました。（*´`´）今後も皆様の愛読にしていただければなあと思います。

第2話・鳴るはずのない携帯

修也は職員室に携帯を返してもらいに行った。
僕は下駄箱で待ってたら。

「あ！竹原 何してんの？」

佐藤沙希、僕はこの娘が好きだ。

「あ…えっと、修也待ち」

「そっか、じゃあまた明日ね」

そう言って沙希は帰って行った。

「おい！ 見てたぞ お前沙希の事好きだろ」

「そんなんじゃないよ！」

「またまた 嘘が下手だなあ 顔真っ赤」

明らかからかわれてる…

「うるせ」

「ごめんごめん 肉まんおごってやるからよ」

「まじ？じゃあコンビニ行こうぜ。」

僕たちはコンビニへと向かった。コンビニは学校からすぐ近くだから便利だ。

「じゃあ祐太、ちょい待ってろよ。」

修也はコンビニに入り肉まんを買って来た。「ほらよ、肉まん」

「おお さんきゅう」

二人は同時に食べた。

「ん…ん…うまい！」

二人は同時に言った。

「熱いけどな」

当たり前な事を修也が言う。

「だな」

二人は肉まんを食べ終えた。

「なあ祐太、今から携帯ショップ行かない？」

「いいけど」

「じゃあ行こう」

二人は携帯ショップへ向かった。

「この携帯いいなあ…祐太さ携帯買ってもらえよ？」

「そうだな、今日言ってみよ。」

そんなこんな話をしていたらもう時間になり二人は家へ帰った。

ガチャ

「ただいま。」

「おかえり」

やけに機嫌が良い…

「なんかあった？」

「まあね プレゼントあるのよ」

と言い僕をひっぱりリビングへ連れて行った。

「あ！携帯だ！これ俺に？」

「そうよ 最近物騒だからね」

「ありがとう！」

さっそく自分の部屋に行き充電をしつつ電源をいれたら。

トゥルルル！トゥルルル！

電話だ…まだ買ったばかりで誰にも教えてないのに…僕は恐る恐る電話に出た。

第2話・鳴るはずのない携帯（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます。m（|）（|）m
裕太の携帯に謎の着信それはいったい誰なのでしょう。次回をお楽しみに

第3話・謎の痛み…（前書き）

三話書くのに結構時間がかかりました
今回でやっと未来からの着信があります
楽しいです
楽しく読んでくれたら嬉しい

第3話・謎の痛み…

ピッ

「も、もしもし」

『もしもし。びっくりした？』電話の相手は母さんだった。母さんはちゃんと携帯が使えるか確かめたいらしい。

僕は携帯を充電し眠りに入った。

朝の日射しが僕の顔を照らす。僕はそれと同時に起きた。時計を見るとまだ時間は余裕がある。

僕は携帯を見て変な事に気づいた。

「0時00分不在着信？非通知か、また母さんかな。」
そう思いリビングへと行った。

「あら今日は早いね。」

「まあね。それより昨日夜中に電話した？」

「するわけ無いでしょそんな遅くに。」

「そうなんだ…」

「電話でもあったの？」

「いや…なんでもないよ」

僕はあえてこの謎の着信の事を母さんには言わなかった。

僕は時計を見て時間が遅刻ギリギリだときずいて急いで家を出て学校へ走って行った。

キーンコーンカーンコーン
ガラガラ

僕は家から全力疾走してギリギリ間にあった。

「おお！我が友よ！今日は遅いのお。」

修也はふざけて言った。

「今日はまた寝坊かなあ〜それよりさ携帯買ってもらったあ！」
僕は携帯を見せて言った。

「おお！それ新しいやつじゃんか。いいなあ〜、アド交換しようぜ」

僕はアドレスを交換しあった。

「それよりさ、佐藤のアド聞かなくていいのお？」

修也はからかう様に僕に言った。

「うるせえ。いずれ聞くら」

僕は佐藤沙希の方を向いて言った。

あっというまに下校の時間になった。僕と修也は部活に入っていないので直ぐに下校した。

僕達は寄り道もせず家へ帰った。

僕は家へ着いた。

「ただいまあ」

……返答がない…僕はリビングへ向かった。テーブルの上には

「ちよつと会社呼び出されちゃったから適当に食べてて」

と置き手紙と1000円が置いてあった。僕はコンビニから弁当を買って来た。弁当を食べ終り自分の部屋に入った瞬間！

トゥルルル！

携帯が鳴った。非通知…また母さんだろう。と思い電話に出た。

『もしもし！』母さんではなかった。何処かで聞いた声だった。

「はい。誰ですか？」

『もしもし！まだ体に異常はないか?!』

「は？間違えじゃないですか？」

『そつか…まだ携帯を買ってもらってあまり時間はたつてないみたいだな…』

「あの…どちらさまで？」

『悪い。名前言うの遅れたな。落ちついて聞いてくれよ…俺はな…お前の未来のお前なんだ。』

「え？俺の…未来の…」

僕は何が何だか分からなくなっていた『ようするに！俺はお前でお前は俺なんだよ！』僕は携帯を落としてしまった。

は？…なに言ってるんだ？まてよ…この声俺と似てないか？何だ？
『もしもし！』

何だよ？！最初の体に異常は無いかって？！

『もしもし！！』

え？俺は今未来の自分と電話してるのか？！

『もしもし！！！どうした！大丈夫か！』

その時！裕太の胸に激痛が！

えっ！ああああああ！何だこの痛みは！ああああああ！胸が…
裂ける様に痛い…

『おい……ど…した！大丈夫…か？！…』 プツ！ツーツーツーッ
ッ……

僕はその痛みと共に気を失い眠りに入った。

第3話・謎の痛み…（後書き）

どうでしたか？何か意見があればなんなりと言って下さい）
^（ノ

読んで下さってありがとうございます。四話も読んで下さいね。

第4話・これが現実（前書き）

第4話：遅くなりました（^| ^ ;）読者の皆さんすいませんでした。
m（| |）m

第4話・これが現実

朝の日射しが僕の顔を照らす。僕はそれと同時に起きた。

「はあ…何だったんだ…昨日のあの激痛は…夢だったのか…」

僕は胸に手を当てながら呟いた。僕は昨日の出来事が夢であるか夢でないかである事を確かめる事を思い付いた。

僕は携帯を手にとり着信履歴を見た。

「……………」

ゴトッ！

僕はこの現実が信じられず、思わず携帯を落としてしまった。

「そんな…そんな…こんな事あるわけがない…ありえない…じゃあ…昨日のあの痛みは…本当にあったのか…」

僕は念仏の様に呟いているとき、リビングから…

「裕太あー！もう時間よ！起きなさい！」

「っは！…そうだ…もう時間だ……はい！今起きるよ！」

僕はこの現実を受けとめる事にした。僕は朝飯を済まし学校へと走って向かった。僕は学校へ向かっているとき胸に変な違和感があった。

「くるのか…」

僕はあの激痛が来そうで怖かった。学校に着くと違和感は消えていた。

「おはよ！」

後ろから修也が僕に言った。

「お…おはよ」

「おい？どうした？元気無いな？どうした？」

修也は心配そうに聞いた。

「じつわ…いや…やつばいいや」「おいいゝ言いかけたら最後まで言えよ」「じゃあ…絶対に誰にも言つなよ」

僕は思いきって修也に話した。

「またあゝ嘘言っちゃって」

修也は嘘だと思っている。まあ仕方ないだろう、普通じゃ有り得ない事だから。「まあ嘘だし 騙されてやんの」

僕は修也に心配をかけたくなかった。修也は顔を膨らませて先に رفتってしまった。

「まあ何時か言うときが来るかもな…」

僕はそう呟いて修也の後を追った。「まあ嘘だし 騙されてやんの」

僕は修也に心配をかけたくなかった。修也は顔を膨らませて先に رفتってしまった。

「まあ何時か言うときが来るかもな…」

僕はそう呟いて修也の後を追った。

第4話・これが現実（後書き）

よんでくれてありがとうございました（<―>）

第5話・告白（前書き）

第4話の最後の所がちょっとしたミスで同じ事を書いてしまいました（<―>）今回の始めの文が前回の終わりの文だと思って下さい
m（――）m

さあ今回は裕太の憧れ佐藤からの告白です

第5話・告白

僕はそう呟いて修也の後を追った。

その時！！裕太の胸に激痛が走った！

…ウツ！…アア！僕は声に出さずに耐えた。やっぱり昨日のあの胸の痛みは本当にあったんだ…痛い…っは！

激痛はおさまった。本の二、三秒の出来事なのに僕には凄く長く感じた。

「はあはあはあ…何だってんだよ…」

キンコーンカーコンキンコーンカーコン

チャイムが鳴ってしまった。

「ヤバイ！早く行かなきゃ！」

僕は走って学校に入って靴を入れようとしたら。また胸に変な違和感が来た。

「今は来ないでくれ」

そう願っていた。裕太の願いが通じたのか胸に痛みは来なかった。

学校はあつというまに放課後になった。

「おい！裕太！いい報告があるぞ」

修也はやけにテンション高めで僕に話しかけてきた。

「ん？どうした？」

「何となあ…佐藤さんがお呼びだよ 何か言いたい事があるらしいよ」

「ええ？！マジで？！」

僕もテンションが上がった。

「マジマジ きつと告白だぞ」

「んなわけあるかよ って何処に要るの？佐藤は？」

「4時に直ぐその公園で待ってるって」

「4時って後2分しかないじゃん！もう俺行くな！」

「おお！幸運を祈る！」

僕は学校を出て学校の真横の公園へ行った。佐藤はブランコに座っていた。僕も隣に座った。そこでやっと佐藤は僕に気がついた。

「ああ…竹原来てんだ…」

「うん。」

僕達は沈黙してしまった。この沈黙をやつぶつたのは佐藤だった。

「竹原君、私と付き合ってください。」

第5話・告白（後書き）

今回は間違えませんでした…多分（＊、ー、＊）ワラ

第6話・運命（前書き）

読者の皆さん書くの遅れてすみませんでした（――；）
これから読んでください（――；）

第6話・運命

僕は突然の告白に混乱した。

「でもさ、俺たちまだ子供だし…」

僕は凄い混乱している。そんな僕を見て佐藤は

「よく考えてね、それじゃまた明日。」

と手を振って帰って行った。

僕はあまりの嬉しさにぼーっとしていた。

っは！っときずくともう外は真っ暗だった。「やばっ！今何時だよ！」

公園の時計を見ると6時

「時間って早いなあ…」

と言いつつ僕は家へと帰って行った。

ガチャガチャ…ドアが閉まっている。

「あれ？6時なのに帰ってないのか…」

鍵を開け中に入ると電気が着いた。

「おかえりー」

母さんがリビングから来た。

「遅かったじゃない、何してたの？」

「いや、修也とちょっと寄り道…」

「もぉ…ご飯出来てるから着替えてらっしゃい」

「はあい」

僕は自分の部屋に行き着替えて携帯を見た。

「昨日のあれ…本当だったのかな…」

着信履歴を見ると…非通知…

「またくるかな…」

トゥルリン トゥルリン メールだ。

「ん？修也か」

『今日やっぱ告白だったろ？』

「えーっと…告白…だった…よっと」

慣れない手付きでメールを返す。

「あ！ご飯食べなきゃ！」

リビングに行きご飯を済ませ部屋に戻るとメールと着信が来てた。

「……………」

着信は非通知からだった。

「また来てるよ…」

とりあえずメールを返し眠ろうとしたら！

トゥルルル！トゥルルル！

「来た！」

開くと非通知…僕は恐る恐る電話に出た。

「も…もしもし…」

「もしもし！まだ大丈夫か？」

「いや…胸に痛みが何度か…」

「もう来たか…」

「はあ…やっぱりあなたは俺なんですか？」

恐る恐る聞いた。

「そうなんだ！信じて欲しい！そして運命を変えて欲しい！」

え？…運命？

「もしもし？！おい！」

「あぁ…聞こえる。運命を変えるって…？」

「あぁ…その事なんだけどな…多分無理かも知れないんだが…」

「無理かもしれない？」

「そう…俺もお前と同じ歳同じ時間に未来の自分から電話がかかってきた…」

「はあ…」

「俺はこう言われた…修也と沙希を救ってくれと…」

「どうゆうことだよ？」

「わからないか？修也と沙希は…事故で死ぬんだ…」

「…信じられねえよ…」

「それは分かる…」

「そんなの嫌だぜ?!」「わかってる…だから救って欲しい!」

「そんなこと出来るはずないじゃんかよ!いつ何処で死ぬって分かって無いんだし!」

「なんのために未来から自分に電話してると思う?」

「あ!そつか!そういうことか…でもなんていうんだろ…そんな簡単に時代?を変えられるのか?」

「それは分からない…俺は無理だった…」

「じゃあ無理じゃんかよ…」

「いや!やるだけの事はやってくれ…頼む…」「分かってるよ、修也と沙希を救えるのは俺だけだからな。」

未来の俺は泣きながら言った。

「ありがとう…」

「おう!ところで…俺の胸の痛みはなんなんだよ?」

「ああ…まだ言っただけだったな…その痛みはな…」

第6話・運命（後書き）

良いところで終わりましたねえ（^w^）
次回も楽しみにしてください
出来るだけ早く書きます（―；）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3716a/>

未来からの着信

2010年12月14日20時53分発行